

<書評>クリスティン・グレイネル著『日本の身体の読みとその認知的ディアスポラ』

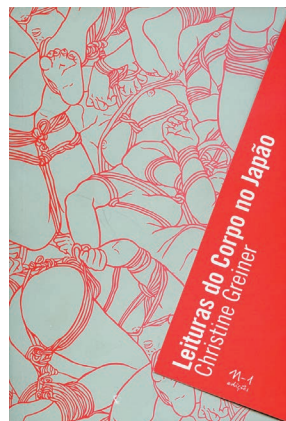
著者	細川 周平
雑誌名	日本研究
巻	54
ページ	133-136
発行年	2017-01-31
その他の言語のタイトル	Christine Greiner. Leituras do Corpo no Japao e Suas Diasporas Cognitivas. Sao Paulo: n-1 edicoes, 2015.
URL	http://doi.org/10.15055/00006429

クリスティン・グレイネル著

『日本の身体の読みとその認知的ディアスポラ』

Christine Greiner. *Leituras do Corpo no Japão e Suas Dispersões Cognitivas*
São Paulo: n-1 edições, 2015.

細川周平



著者のグレイネルはサンパウロのカトリック大学東洋学科准教授で、これまでに『舞踏——展開する思想』（一九九八年）、『能と西洋』（二〇〇〇年）のような舞台芸術の著作を出版した他、トーキョーガキ（二〇〇八年）、肉体の叛乱（二〇〇九年）、細江英公映像の肉体（二〇一四年）などの展覧会を企画し、最近は『日本の映像1・2』『ヒキコモリ——ネットのなかの幽閉生活』のような写真集・論集の編者として現代日本文化の紹介に力を尽くしてきた。「お茶生花能歌舞伎」の伝統セットとも、「マンガアニメ寿司柔道」の大衆文化セットとも異なる同時代の事柄を精力的に伝えてきた。本書は、身体概念から日本文化の歴史と現代を縦横に論じた野心作である。現場に近い位置にいて、本書でも劇作家との直接

の対話が結論で生かされている。自らはヨーロッパ系移民の子孫で「東洋を夢見てきた」とエビグラフで明言され、家族のルーツ探しから始まることが多い日系人による日本研究と異なる出発点と姿勢を宣言している。日系人の社会的存在感に比べ、日本文化を語る場に乏しいブラジルにあって貴重な知性で、各章ごとに自身の日記から手書きによる日本滞在中の微細な観察が記され、詩的な印象を残す。全体としては、日本の身体感覚・表現の動静が列島の外へ拡散し（彼女はディアスポラ、授精ないし播種と呼ぶ）、個別的かつ偏在的な位置にあることを確信する方向で各章が組まれている。表紙と章の区切りにはその内容にふさわしく、日系ブラジル人アーティスト、フェルナンド・サエキによる女体縛り図

が配されている。元は日本固有のボルノグラフィックな表現様式が、日本性をそぎ落とし（しかしアーティストの出自と微妙に関わりつつ）ポップ・アートのモチーフとして応用・公認された変容は、著者の主張する知覚・認知の連鎖を示す良き例だろう。

第一章「最初の地図」は列島人の身体観の基本を中国医術とインド仏教に求め、その伝来と変容から説き始めている。湯浅泰雄、栗山茂、オーギュスタン・ベルクの著作を参考に、陰陽と氣の身体・宇宙観はヨーロッパの心身二分論と違い、両者の間の非物質的流れを重んじ、因明と森羅万象の宗教観が独自の自然観（「自ずからしかり」）を築いた。この基本設定が医術・信仰を越え、時代を超えて和歌、連歌、能、戦後芸術にも及んでいることが以下の章で例証される。

第二章「民族主義と奇行」は池上英子、ウィリアム・ブレヒャーを読みながら、鎖国時代に打ち立てられた「国民的身体」（国体）の解明に当てられる。旧来の島国孤立論に対して、国土の内と外の交流が強調され、そのありようは個人レベルの自己と他者の相互浸透の延長として概念化される。島なればこそ多くのレベルで交流が進み、移ろいやすさを本質とする。それぞれの場の生成には和辻的な風土が大きく関わっているという。水戸尊皇派と百姓一揆という政治的に正反対の立場が、共通の国民身体概念を支えに極端に走る共通性を持つ。また連歌の座や江戸時代の服飾を

例に作者性を押し出さない「変形のテクノロジーとしての美学」も話題としている。

第三章「メディアアの回路」は明治維新時の近代西洋観を起点に、一九四〇年代の「近代の超克」が西洋との対立を強調すればするほど、偏在する西洋に呑み込まれていると論じている。身体の話は戦時中の建国体操や優生法に触れながら継承されるが、あまり展開されない。それよりも超克を心理的に準備したエログロ・ナンセンス、モボモガ風俗が詳しく論じられる。ここではミリアム・シルヴァバーグを参考に、デパート、カフェ、洋装、ハリウッド映画のようなアメリカ式の消費文化が急速に浸透したことを重く見て、都市民の身体の知覚を変形したと述べている。昭和初頭の急速なモダン化が「追いついた」感を深め、戦時中の「超克」感の下地を作った。

第四章「戦争の痕跡」はまず裕仁の「人間化」をいくつもの例から確かめ、続いて焼け跡の象徴的復興とその破壊として『君の名は』と『ゴジラ』を並べている。さらに著者の専門である戦後美術から読売アンデパンダン展、赤瀬川源平とハイレッド・センター、具体、フルクサスへと話題は広がる。

第五章「パフォーマンスのアクション」は岡本太郎、土方巽、村上隆の三人についてそれぞれ「芸術は爆発だ」「芸術は肉体の再発明だ」「芸術は商品だ」のキャッチフレーズから論じている。引

かれるのはマルク・ダシ、ミリアム・サス、トマス・ラマールらの論だ。岡本太郎についてはフランス人類学・シュルレアリズムとの交流が重く見られ、土方巽についてはジュネ、アルトールとの関連が記され、三島由紀夫が暗黒舞踏の礎石を築いたとされる。村上隆のスーパーフラット概念が奇想の浮世絵に由来し、十九世紀のジャポニズムが今ではマンガ、アニメの国際的人気に通じ、その資本の回路もまた表現に取り込む村上の大胆に、著者は感服している。

第六章「機械の外の幻想」は一九八〇年代以降の美容とファッション業界の繁昌が、従来のただきれいに見せるだけの地点を外れ、身体を生体機械と見なす点で、従来の「日本らしさ」とは別の次元の表現に成り立っていると考える。後半ではパラサイト・シングル、引きこもり、ネットカフェ、ラブホテルに見る現代日本の孤立と連携のあり方を経由して、孤独死と延命治療の両極端に走る生死状況を論じる。

終章「認知的ディアスポラを求めて」は現象学という生体と死体の二元論（身体と精神の二元論ではなく）が、日本の武道や芸術で見られることが再確認される。彼女の長い研究のなかで、日本の身体性の規約を探る発想は廃棄され、認知と知覚を一体化した行動と見なす「知覚の連鎖」の概念を採用するにいたった。この連鎖は「日本の身体 of 虚構の地図作製法」を作り出す。抽象的な

国民政治の身体からダンサーの身体まで、彼女は知覚と認知の網目に沿ってからだを理解している。最後に今後の方針として三点が挙げられている。一、文化の物質的側面だけを見る見方を排し、知覚の流れ、主体性の生産に焦点を当てる、二、所与のモデルとして異文化を考えるのではなく、普請中のダイナミックな認知のネットワークとして文化を考える、三、ジルベール・シモンドンと和辻哲郎、そして二人の注釈書にもとづき、「同一性」を「単独性」^{シンギュラリティ}（特異性）の概念に取り替える（一九九頁）。

出版社名と上の要約が語るように、ドゥルーズやフーコーの語彙体系は彼女に近しい。かつて記号をカギに日本文化を説いたバルトに対して、グレイネルは身体をカギに似たような企てを試みる。直接関わってきた現代美術・舞台を俎上に上げた節は最も肉厚に、整然と論じられる反面、幕府権力についての節は心もとない。日本文化の単独性など多方面の話題が飛び交う軽快さは心地よいが、思い違いも散見される。「ワーキング・プア」は *walking poor* ではなく *working poor* の音訳だし（「歩いてても歩いてても貧乏」という語感^{アイデンティティ}は貴重だが）、天皇の写真についても誤解している。一部の日本語概念にはその特異性を視覚化するためか、日本文字がローマ字表記に添えられているが、それ自体は議論の対象とはならず、大多数のポルトガル語読者には東洋趣味に終わるしかない。その選択が恣意的で、たとえば美容の章で「小豆」「糠袋」がなぜ

漢字表記を必要とし、他のもつと本質的な概念が素通りされるのか理解に苦しむ。

著者自身の日本滞在の印象と書物の中の旅が入り混じる哲学的なエッセイで、裏表紙には今後の日本旅行の前に読んでおきたいと、ブラジルの哲学者が推薦文を寄せている。本書自体が旅である、と。ブラジルは世界最大の日系人口を持ち、彼らの一世紀にわたる社会や産業への貢献と文化交流が公式的に繰り返し述べられながら、日本語とポルトガル語の限界から一歩進んだ知的な交流は限られてきた（ことにサンパウロ州から離れるに比例して）。本書は英語・フランス語による日本研究の現況を、ポルトガル語読者に伝える役割も果たしている。数が多いとはいえないポルトガル語による日本文化論の今後の指標となるだろう。